

2024年3月10日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ「永遠の安息」

申命記5：12～17、使徒言行録2：43～47

問103第四戒で、神は何を望んでおられますか。

答 神が望んでおられることは、第一に、説教の務めと教育活動が維持されて、わたしがとりわけ安息の日には神の教会に熱心に集い、神の言葉を学び、聖礼典にあずかり、公に主に呼びかけ、キリスト教的な施しをする、ということ。第二に、生涯のすべての日において、わたしが自分の邪悪な行いを休み、わたしの内で御霊を通して主に働いていただき、こうして永遠の安息をこの生涯において始めるようになる、ということです。

二つのことが言われています。第一の部分は安息日の内容です。安息日に何をするか。キリスト教会においては、ユダヤ教の安息日を継承しておりませんが、イエスさまがよみがえられた週の初めの日、日曜日を安息日と決めました。その日には教会に集まり、神の言葉を学ぶこと、つまり説教を聴くこと。聖礼典、洗礼と聖餐に与ること。また公に主に呼びかけること、それは祈りです。そしてキリスト教的な施しをする、これは献金を指しています。少し説明が必要でしょう。献金というと、日本の教会ではほとんどが牧師の招聘も含め自分たちの教会の維持、管理のために用いられますが、ヨーロッパのいわゆるキリスト教国においては、教会の維持は国民の税金が財源として当てられます。むしろ献金は社会的な奉仕に用いられます。それで献金を「キリスト教的な施し」と表現しています。ですからここでは説教、聖礼典、祈り、献金と礼拝の内容が教えられています。このことについては、今日は特に説明いたしません。それらは日曜日の礼拝の内容として覚えておきましょう。

今日は特に第二とする部分に注目します。「第二に、生涯のすべての日において、わたしが自分の邪悪な行いを休み、わたしの内で御霊を通して主に働いていただき、こうして永遠の安息をこの生涯において始めるようになる」ここでは安息日の意図すること、その内面的な意味を明らかにしています。安息日と訳されたシャバートには「やめる、中断する」という意味があります。この日はわたしたちがその手の業を止めること、信仰問答は「自分の邪悪な行いを休み」としています。それよりも「わたしの内で御霊を通して主に働いていただく」とあります。これは少し皮肉と申しますか、ユーモアさえ感じるような表現です。わたしたちが働いていると神さまが働けないから、わたしたちは休まなければならないと言うのです。このような趣旨のことは宗教改革者のカルヴァンも述べています。ジュネーブ教会信仰問答で「霊的安息とは何ですか。それはわれわれのうちに主が御業を行われるために、われわれ自身のもろもろの業をやめることであります」（問172）とあります。

その日は、神さまに働きの場を譲るのです。もちろん主権者たる神さまですから、わたしたちが譲らないと神さまが働けないということはないのですが、わたしたちが手の業を止めないと、神さまが働いておられることが見えてこないのです。本当は毎日、わたしたちは神さまが働いておられることを覚えなければなりません。ですから信仰問答では「生涯のすべての日において」と言います。ところが毎日働いていますと、自分の力で、自分の働きで自分の命を養っていると考える。「家族を養う」「扶養家族」と言います。自分で働いて家族を養っている。無神論者が多い日本人にはどうもそういう感覚が強いかもしれません。だから「誰のおかげで飯が食えるのか」という言葉が平気で出てきます。これは甚だ傲慢であります。

そもそもわたしたちが働くことができるのも、ご飯が食べられるのも、神さまがその環境を与え、食物を与え、健康を与えてくださっているからです。そのことを忘れると途端にわたしたちの中に自分が頭をもたげてくる。自分が命を養い、命を守っている。自分で食べ物を得ている。この感覚を一度リセットしなければならない。立ち止まって思い起こす必要があります。神さまがすべてを養い、ご支配されていることを思い起こす。それが安息日の役割です。

ここでわたしたちは信仰問答の最初の間引き戻されるのではないのでしょうか。

問1 生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。

答 わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。この方は御自分の尊い血をもってわたしのすべての罪を完全に償い悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。

あなたは誰のものか。あなたの命も、あなたの人生も、それは神さまのもので。神さまがイエスさまによって罪の支配から買い取ってくださいました。わたしたちの人生は神さまのものとして祝福され、聖別されています。ここに天地創造の目的があります。「この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し聖別された」(創世記2:3)とあります。この世界もわたしたち人間も本来、神さまの祝福と聖別の中にある。「聖別」とは、神さまのものとして特別に取り分けられることです。日曜日に礼拝で御言葉を聴くときに、わたしたちはイエスさまの救いによって罪の支配から買い戻され、神さまのものとして特別に取り分けられていることを思い起こすことができるのです。それは幸いなことではないでしょうか。もしこのことがなかったら、わたしたちは、仕事やこの世の事柄に忙殺されて、世界の意味、自分の存在の意義、命の尊さを見失ってしまうでしょう。現に世の中はそのようになっているのではないのでしょうか。

イエスさまは「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ11:28)と言われました。「休ませてあげよう」と主の安息の中にわたしたちを招いておられます。なかなか休もうとしない、御前に来て重荷をおろそうとしないわたしたち、働き続けるわたしたちのためにイエスさまは自らこの世に来られ、まるで神さまであることを中断するようにして、この罪の重荷を十字架において引き受けてくださいました。イエスさまがわたしたちの重荷を代わって負ってくださいました。だからこそわたしたちは神さまの御前に真の安息を得ることができるのです。これはレジャーで得るような一時的な気晴らしではありません。人間の最も深い部分、魂が求めている永遠の安息です。

天の父よ。あなたの創造の目的である祝福と聖別へと招いてくださる幸いを感謝します。罪の重荷をおろして、あなたのものとされた喜びを持って、この一週間を始めることができますように。すべての命の主であるあなたを讃える生活でありますように。主の御名によって祈ります。アーメン。